

様式 1

研究報告書（平成 27 年度）

提出者 川本 彩花

提出年月日 2016 年 4 月 28 日

**【本ユニットにおける研究テーマ】**

和文 音楽都市〈楽都〉の形成と地域振興に関する比較社会学的研究

英文 A Comparative Sociological Study of Constructing the Representation of Music City  
and the Regional Development

**【研究のねらいと目的】**（600 字程度）

近年、文化行政の予算削減や市場化の圧力などを背景に、「芸術」の芸術的価値のみならず、広くその社会的な役割や価値が問われるようになってきている。こうした現代社会における「芸術」のあり方の変容（＝芸術至上主義のゆらぎ）をよりよく理解するためには、そもそも、なぜ／いかにして「芸術」という表象すなわち芸術至上主義が形成されたのかを、当該社会・時代との関係のなかで問いなおす作業が必要なのではないか。

このような問題意識のもと、これまで、芸術のなかでも音楽に焦点を当て、①芸術至上主義はいかにして 19 世紀西欧社会に出現したのかについて、ベートーヴェンを事例に、J. ハーバーマスの文化的合理化論を理論枠組みとして検証してきた。②また、芸術至上主義は現代日本においていかに受容されているのかについて、長野県松本市での調査（調査票調査）をもとに検討した。

これらをふまえて本ユニットでは、現代社会における「芸術」のあり方の変容（＝芸術至上主義のゆらぎ）に焦点を当て、その具体例として、文化・芸術を活かした地域活性化や青少年育成に関するプロジェクトの調査研究を進める。とくに本研究では、音楽都市〈楽都〉に焦点を当て、まず日本を主なフィールドにし、東アジア、さらには西欧へとフィールドを拡大しつつ、音楽都市〈楽都〉の地域表象（地域イメージ）の形成、および文化・芸術を活かした地域活性化の方策について考察していきたい。

**【研究業績】** 学会報告・論文など

◆研究会報告

川本彩花、「現代日本における芸術至上主義の受容——クラシック音楽祭オーディエンス調査の分析」、京都大学アジア研究教育ユニット第 10 回学際融合コロキウム、京都大学、2016 年 3 月。

◆共同研究

「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケム社会学を事例として」、2015～2018 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）、課題番号：15H03409、研究代表：中島道男（奈良女子大学））、2019 年 3 月まで研究協力者として参加。

**【成果の概要】**（800 字程度）

本年度の成果は、主に次の 3 点にまとめられる。

第 1 に、音楽都市〈楽都〉の形成と地域振興について、来年度以降の国内フィールド調査（文献・資料収集、聞き取り調査、参与観察）に向けて、先行研究の収集・再検討、および予備調査を行った。地域社会学や観光社会学、文化・芸術社会学のとくに文化政策研究等における先行研究を収集・再検討し、本研究の背景や位置づけ等を明確にしていった。

第 2 に、現代日本における芸術至上主義の受容について、本ユニット第 10 回学際融合コロキウムにて報告を行った。これは、2011 年から 3 年間、研究協力者として参加させていただいた信州大学を拠点とした共同研究「文化資本と社会関係資本の関連性——クラシック音楽祭参加者への調査によるアプローチ」（2011～2013 年度科学研究費補助金挑戦的萌芽研究、課題番号：23653121、研究代表：辻竜平(信州大学)）において実施した調査票調査の結果をもとに検討を進めたものである。これから論文執筆・投稿へとつなげていきたい。

第 3 に、本年度から 2019 年まで、デュルケム／デュルケム学派研究会を拠点とした共同研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケム社会学を事例として」（2015～2018 年度科学研究費補助金基盤研究 (B)、課題番号：15H03409、研究代表：中島道男(奈良女子大学)）に研究協力者として参加させていただく機会を得た。この共同研究の参加等を通して、本研究についても、とくに音楽都市〈楽都〉の地域表象形成過程の分析枠組みについて新たな知見を得たため、これからの研究遂行に反映させていきたい。また、2016 年 2 月にはスペイン・バルセロナ調査に参加し、さらなる国際的研究ネットワークも構築できた。

**【通信欄】**